

## 保育計画成果報告書

|         |                              |
|---------|------------------------------|
| 法人名     | 社会福祉法人 清新会                   |
| 施設名     | あさひ保育園                       |
| 報告者（役職） | 坂口 美恵（施設長）                   |
| 住所・連絡先  | 福岡県福岡市城南区梅林4丁目5-27           |
|         | ☎ 092-874-2388               |
|         | E-mail asa-hi@aqua.ocn.ne.jp |

### ○タイトル（保育計画）

『動ける子』～考える力と根気を培う運動保育援助～

### ○主な助成備品

ネット式太鼓橋/カラーバトン/ロクボク付き滑り台/ブロックマット各種/ワンタッチ鉄棒/フォーム跳び箱/カラートンネル/コンビハイハイランド 等

## 1. 実施した保育計画策定の目的

「動く」ことを通して子ども達は、いろいろな事を吸収し、見るものや触れるもの、体験を通して言葉の数も増えていきます。当然動ける子どもは色々な刺激を受けられるということになってきます。身近では、人が生きるために持って生まれた運動能力が、大人の過剰な援助や環境により乏しくなっている姿を感じます。0歳児は、把握反射があり、例えば大人から離れないようにしがみつきぶら下がり柔軟な体で活動し身体を発達させています。歩くようになるまでは、大人は、色々なかかわりを持って寝返りや這い這い、伝い歩き、歩行と促していくのですが、「自分でしたい」という気持ちが出てくるに従い、見守るどころか、大人の気持ちを優先して面倒だから抱っこして移動、靴も履かせる、靴も大人が持つ、車の移動が速いから歩く機会はほとんどない、もしくは、怪我が怖いので先に手を差し伸べ、行動を止めさせる等などの過剰な援助が見受けられます。

子どもは、好奇心や夢中になって遊ぶ・何度も繰り返し試行して出来たという達成感をえる機会を得ないまま、運動能力や根気ばかりを求められているように感じてなりません。生まれた時に持っていた力を持続し、発達させる事が日常の生活環境や大人のかかわりによって出来るのであれば子どもの考える力と根気も培われてくると期待します。

しかし、あさひ保育園では、園庭が三角形の形状で狭く、交通量の多い道路に隣接しており、思いっきり走ることもボールを蹴ることも難しい環境にあり、2階に屋外遊技場を設置していても天候に左右され、ホールもない為、廊下や保育室での限られた空間の中で粗大運動・さくらんぼリズムをしています。

園庭は、固定遊具ではなく築山を設置して何も遊具のないところでも工夫して考えて活動を促すものの、特に未満児が思う存分体を動かし活動できる環境がないことが課題でした。乳幼児の運動発達を促す環境を整えることで、心身ともにバランスよく成長していくことを期待するとともに、子どもの育ちを支える大人の言動にも変化が出てくることで、保育園が子どもとの共生を喜び合える場となることを目的としました。

## 2. 具体的な実施内容

①0歳児は、運動遊び・感覚機能・探索操作の項目をあげ形成月齢を記録する。

1歳児からは、入所時/10月/2月に項目別に経過記録をとる。

3歳児から5歳児は、11月と2月に簡単な体力測定をする。

②毎朝20分間、体育ローテーションを実施し、繰り返し存分に自分の気持ちで遊ぶ機会をつくる。



③持ち運び自由で、子どものその日の姿に応じて粗大遊びのコーナーを保育士が負担に感じず環境設定しやすい状況をつくる。子どもの育ちに着目し、その時期に必要な運動環境を整える。



④保育者・保護者への子ども理解を深める。

日常的に環境を設定している中で、遊ぶ子どもの姿を見守りながら子どもの発達に応じた運動欲求を満たすことで情緒面も安定してくることを伝える機会をつくる。



### 3. その成果と評価

#### 期待する成果に対する評価

##### ① 自分の意志で自在に自分の体を動かせるようになる。

安全な室内使用の運動遊具が普段の生活の環境の中にあるので、「跳びたい」「転がりたい」「くぐりたい」「上り下りしたい」という運動要求を、危ないからと止められることなく、遊ぶことができています。今日がうまくいかなくても何度も繰り返し継続して遊べるので、ある日できた時の喜びは大きい。



##### ② 自分の命を守るための身体能力が身に付く。

大人が過剰な援助を止め見守りに徹することで、高さのある所に登っては、むやみに飛び降りたりする等の姿が減り、後ろ向きに降りる。手で体を支える。足を下ろしてみても高さを確かめる等、自分の身体を使い、考え行動する姿へと変化がみられるようになった。又、いつも生活の環境の中にあるので、机や椅子や棚など危ないところについて欲求を満たす必要がなくなってきている。満足すると自然に落ち着き、興奮状態が続かないので混雑やトラブルになりにくい。



##### ③ 満足感・達成感を得られることで考える力と根気が養われる。

夢中で遊んでいる子ども達に対して、大人が「時間だから」と途中やめさせたりすることを控え、保育士同士や保護者同士が見守りを託すことで、ある程度の時間の制限をなくした。子ども達は、「あと〇回！したらね。」「〇〇先生と帰る」と自分の気持ちで終わりを決める。満足するまで遊ぶことが出来たという安心感を得て、気持ちを自己コントロールする力や、次の日も次の日も挑戦する粘り強さがみられるようになってきている。



「もう一回！」



「みて！みて！できたあ」



④ 社会性・認識力・語彙・空間認知等の大人になってから必要になる巧緻性が育まれる。

いつでも体を使って遊べるという安心感は、子どもたち同士でルールを作り始め、逆上がりができるように助けあう場面や、工夫する力、大人の準備や片づけを手伝う、年下の子に対して譲る、危ないと思ったら止める等の姿も出てきている。また、身近な道具を使って遊びを創造するようになってきている。



3歳児

「やったあーとどいた！」



5歳児と1歳児

「いいよ！ゆっくりで」



5歳児

「ジャンケンで交代ね」

⑤ 子どもが「何を楽しんでいるのか」「何処に満足感を得られているのか」等、子どもの姿を通して、関わる大人の言動が変わってくる。

常に運動遊びができる環境があるため、当初「子どもが帰ろうとしない」「危ない」などと大人の都合による遊具の撤去がみられたが、子どもが「みて！みて！」と出来るようになった事を知らせ、何度も出来るまで根気強く繰り返す姿や、大人が手を貸そうとすると「一人で出来る！」と自信をもって取り組む姿を見せることで、遊びだけではなく生活面においても大人側に“見守る”姿勢が生じてきた。大人の行動が変わることで言葉かけも変化し、「すごい」「やったね」「そんな事もできるんだあ」「ここで見てるよ」「大丈夫」等と大人の褒め言葉が増え、更に挑戦し続ける子どもの姿がある。また、自分の子どもだけではなく、他の子どもに対しても褒め言葉や関心が増して、みんなで子育てしているような雰囲気が生じている。



⑥ 運動発達の臨界期を知ることで、子どもの発達を促す環境づくりを考え提供できる。

- 食事の時の食べこぼしが多いのは肘が下がっていてスプーンを持ち口に運ぶ力が未熟ということに気づき、遊びの場面に腕の上げ下げが出来るあそびを取り入れる。
- 姿勢が悪い子に注目すると背筋の弱さによる姿勢維持が難しいことに気づき、背筋腹筋を使う運動遊びに取り入れる。
- 着脱の際にズボンやパンツを引き上げる力が未熟な子へは、遊びの道具を変えてみる（フープの中に入り足元から頭まで潜り抜けする遊びや巾着袋のだし入れ遊び等）

○座ってパンツをはかせていた子へ運動発達を見ながら壁に寄りかかって立って足を入れる方法を伝えるタイミングがわかる。

大人が「出来ない」ことに着目するのではなく、身体を自在に動かすせる為には、どんな遊びが必要なのか、どんな環境を用意すれば活動が容易になるのかを考えるきっかけとなっている。大人の指示や注意に偏る言葉かけや過剰な援助が減ることにより子どもが、他の子どもをモデルとして行動し、自分で考え手段や方法を見つける姿が増えつつあるように感じる。



#### 4. 今後の課題と展望

体力測定の実施が26年度からとなり、当園で継続保育を受けた年数との対比データが取れておらず、子どもの運動能力と思考力・根気の推移を確認できるまでに至らなかったため、引き続き体力測定を継続的に行っていきます。しかし、保育園での生活場面だけではないところでも子どもたちの動ける力が発揮されています。例えば、あさひ保育園では、3歳以上児になると遠くの園外保育も貸し切りバスを使用せず、公共機関を乗り継ぎ（地下鉄・バス・徒歩）目的地まで移動します。身体が自分の思うとおりに動くということは、子どもたちの活動が広がり、苦にすることもなく参加し、「出来た」という自信は、保護者にも伝わり休日の外出を公共交通機関を使用するなど、家庭での生活も変化が出てきているようです。送迎時の階段の上り下りも、自分で歩きたがり容易にできるので、いつまでも抱っこされて移動する姿が少なくなってきました。

保育者も保護者も子どもの力や可能性に気づき、「信じる」姿勢に変わってきているように感じます。今年の運動会では、保育士からの提案で、低年齢児から順に出るのではなく、年長児から出場することでモデルを見て年下の子が「やってみよう」という気持ちを高めることから導入し、子どもの力を信じ、見守る姿勢へと変わってきました。それに応えるように持っている力を発揮する子ども達。又、年長児や年中児は、大人をモデルにして道具の出し入れなどを進んでする姿が、保護者にも共感を生み『自分で考え行動できる』をねらいとした園の保育方針を理解して頂ける一つの機会となりました。同時に、子ども達が主体的に活動する事により、大人が抱える「大変さ」が軽減していることに気づき始めています。遊びの中の「楽しい」が、子どもの成長発達を促し、同時に物的環境と子どもを信じる人的環境が相互に作用することが大切だと実感しています。

開園して間もないにもかかわらず、第一生命財団様から助成金を頂き、子どもの運動環境を整える事が出来ました。子どもだけではなく大人も気持ちのゆとりが出て、子どもとの共生を喜び合えるようになってきています。26年度からは、子育てサークルも実施できるようになり地域の子どもたちの運動あそびにも活用させていただいています。有難うございました。これからも、子どもたちの為に、家庭と保育園が『共に考え・共に育つ』環境を整えてまいります。